

感情が規定するフレーム：
スリーマイルと福島原発運動の比較研究

日本学術振興会特別研究員 DC (中央大学) 村瀬里紗

1. 目的

本報告の目的は、感情がどのようにフレームの選択または採用、運動団体の活動、そして運動の目的に影響するかを検討することである。感情は、運動に参加する個人のモチベーションを高め、運動団体内のメンバー間で一体感を高めるものとして、社会運動において必要不可欠な要素として議論されてきた。そのため、感情をフレーミングなどの「既存の概念的道具 (existing conceptual toolkit)」と接合することによって社会運動の分析枠組みに取り入れようとする研究は数多く存在する (Jasper 2011; Schrock, Holden, and Reid 2004)。しかし、フレーミングと感情に関するこれまでの研究の主要な分析は、運動団体のリーダーが潜在的参加者に対し、戦略的にフレーム・メッセージを投げかけ、その結果呼び起こされたものとして感情を捉える。この議論には、フレーム投企がまず先にあり、その後にある種の感情が発生する、という因果的順序が想定されている。しかし、この議論は、例えば原発事故において見出された「モラル・ショック」(Jasper 1997, 1998; Jasper and Poulsen 1995)など、フレームが戦略的に形成される以前に感情が存在する運動にはあてはまらない。本報告では、1979年スリーマイル原子力発電所事故と2011年福島第一原子力発電所事故に遭遇した地元住民の感情の比較研究を通して、感情のあり方がフレームの選択に影響を及ぼすこと、またさらに感情のあり方がその後の運動団体の活動また運動の目的に影響を与えると主張する。

2. 方法

原発事故被害に遭った住民の感情、投企されたフレーム、さらにはその後の住民による運動の動向が本研究で使用するデータであり、比較の対象である。とりわけ、住民の感情を抽出するため、スリーマイルと福島で、原発事故直後に起きた集会における参加者住民の発言をテキスト化して、データ・ソースとする。福島での原発事故に関しては、福島市で行われた集会、スリーマイルでは、Lancaster 群で行われた集会のテキストから住民感情を抽出する。また集会で表出した住民感情に対する解釈を補完するため、インタビュー調査から得たデータ、さらにはスリーマイルに関しては集会に実際参加し原発事故直後から運動を観察していた Walsh (1988) と Tredici (1980) の観察データを用いる。

3. 分析結果

原発事故直後、スリーマイルにおける地元住民の間では無力感、裏切り、恐怖、混乱、そして怒りなどの様々な感情が交錯した。また事故直後は、原発の危険性や放射能廃棄物の問題を訴えるフレームなど、多様な運動組織による複数のフレームが投企されていた。しかし、原発を運営する電力会社の技術的、人的過失が明らかになり、多様な感情は怒りへと収斂していく。怒りは電力会社や原子力規制委員会に対する厳しい批判へと人びとを動かす。その結果、当時複数存在したフレームの中から、「不正フレーム(injustice frame)」が採用されるに至る。不正フレームをもとに、明確な「敵」を設定し、その敵に対して責任追及を行うことが運動の目的となった。スリーマイルと同様に、原発事故直後、福島でもまた様々な感情と複数組織が投企する多様なフレームが交錯していた。しかし、危険であることを承知しつつも避難できない日常の中で生活することを強いられた結果、「どうすることもできない」という諦めの感情が、人々の間で支配的になった。その感情は、多様に存在したフレームの中から「安心・安全フレーム」の選択を促進する。また、このフレームを採用した人々にとっては、福島での状況を「危険」と定義する運動団体の見解は生活上の不安を増幅させるため、敬遠されるに至る。その結果、福島での市民活動は「放射能がある生活とどう付き合うか」を課題とし、メンバーに対して生活上のサポートを与えることを目的とする内向きな運動へと発展していった。

4. 結論

本研究で得られた分析結果は、運動団体がどのようなフレームを採用するか、またその後、運動がどのような目的や活動を選択するかは運動が発生する以前に存在する感情のあり方によって決定され得ることを示唆する。また、この結果は、社会運動が、運動のサイクルを上昇的に通過する過程で種々の活動が大きな一つの運動に収斂するプロセスに対する新しい解釈のあり方も示唆する。